

## 第三回國際ダルマキールティ會議

岩 田 孝

第三回國際ダルマキールティ會議は、11月4日より三日間、廣嶋において開催された。後期大乘佛教の哲學を中心に、佛教と他學派との對論や、チベット佛教思想への影響などに關して、専門領域を共有する諸學者が集い、より徹底した考究と議論の場を設けるという主旨に基づいて、第一回が1982年に京都大學において開かれ、續いて、第二回は1989年ウイーン大學で開かれた。今回はその第三回目であり、コンヴェーナーは廣嶋大學の桂紹隆教授である。前回の報告においても述べた様に、この國際會議の特徴は、部會に別れることなく、全員が同一の場に出席して、互いの研究成果を基に議論を行うという點にある。通常の國際會議の場合、規模が大きすぎて、部會に出席する研究者でさえも専門領域を異にすることがあるということは度々経験するところである。それに對して、國際ダルマキールティ會議の場合には、發表者は互いの研究内容をほぼ把握しており、白熱した議論が交わされるのが常である。今回は、初日から發表者同志が論文において相手の說に異議を唱えるという場合もあった。質問者の中には、他者の意見を顧慮せずに、狀況に合わない我田引水的な論難を挑發したり、自說に基づく演說調の質問もあったが、桂教授が率先してそうした質問を制止し、より建設的な議論を取り擧げる爲の進行役を擔われた。これは、多くの國際會議に出席し経験を積まれた同教授の英斷であり、その進行役には、參加者の誰もが敬意を表したところである。

今回の國際會議での發表論文は、前回に比較して非常に多く、それらすべてについて報告することは不可能であるが、以下に、筆者の印象に残った發表について簡単に紹介したい。

初日の午前中には、梶山教授による會長挨拶に續いて、ローザンヌ大學のブロンクホルスト教授、小川助教授、大前助教授等が、法稱 (Dharmakīrti) のアポーハ (apoha) 説を中心とする言語哲學に關して發表を行った。次に論題となったのは、法稱の主著『プラマーナ・ヴァールティカ』 (Pramāṇavārttika) の第二章に論じられている佛陀の權證性の問題である。佛陀が信頼性を有し、世間にとっての妥當な據り所となられた (pramāṇabhūta) という意味で、佛陀が權證性をもつこと、それはどのようにして成立するのかという問題意識のもとに、その成立の仕方についての二三の解釋が論じられた。發表者は、早大でもこの國際會議の直前に講演をして頂いたハンブルク大學のフランコ博士、筆者のハンブルク時代からの同僚であるエトケ教授などである。

午後には、法稱の論理學についての發表が行われた。陳那 (Dignāga) の論理學では解決できなかった不共不定 (asādhāraṇa-anaikāntika) 論證因を、法稱は、歸結の導出に關して不確定な論證因であると明確に規定したが、そのことが法稱にとって、「消滅性」を論據として物事の刹那滅性を論證する古刹那滅論證から、「存在性」を論據とする刹那滅論證に向けさせた要因であろう、とウィーン大學の小野博士は論じた。筆者は、佛教徒の提示した無自性性論證の妥當性について考察を行った。物事が本體 (svabhāva, 自性) を有しないという命題を證明する無自性性論證の場合、主題である物事の自性が存在しない以上、その物事自身も存在しないことになり、そうした存在しない主題に關して如何なる定言も、また、論證因をも立てることはできないではないか、と他者は反論するが、これに對して、法稱及びその後繼者が、その矛盾を避け、如何にこの論證を自立論證として成立させたのか、という點について論じた。ウィーン大學のシュタインケルナー教授は、シャーンタラクシタに歸せられた、しかし、實際には密教的要素を含む、より後期の作品である『タットヴァ・シッディ』 (Tattvasiddhi) の寫本の解讀の成果の一つとして、後期の密教の文獻の中に見られる法稱の因果論について考察を行った。

二日目の午前中には、法稱の存在論が中心のテーマとなり、そこでは、稻見助教授が因果關係の決定方法についての法稱や後繼者の諸説を論じた。午後には、法稱より後の時代の諸論師の説が論題となった。物事の非存在を導く爲の

### 第三回國際ダルマキールティ會議（岩田）

論證因として法稱によって擧げられた「(物事の)非認識」(anupalabdhi)なる論證因に關して、ケルナー氏、計良氏による發表があった。森山教授は、上述の無自性性論證の問題點を、カマラシーラによる無自性性論證の論述を資料にして考察した。11世紀のジュニャーナシュリーミトラの説に關しては、久間氏が「矛盾」概念の定義について、そして、谷教授は最近の研究成果として外遍充説について發表を行った。論證因を歸結が論理的に包攝することは、推論の成立の爲の大前提である。その包攝關係の成立は、印度論理學では、喩例の提示に基づいていた。これが外遍充論である。それに對して、ラトナーカラジャンティは、喩例によらずに包攝關係の成立が可能であるとする内遍充論を立てたことが知られている。この内遍充論に反對して、ジュニャーナシュリーミトラが従來の外遍充論を支持したという點を谷教授は新たに明らかにした。更に、夜の部では、因の三相を規定する爲に用いられた限定詞“eva”の現代的な解釋をガネーリ氏が發表し、續いて、桂教授は、その限定詞の役割を、陳那の説に遡って明快に解明した。

三日目の午前中の發表でテーマとなったのは、法稱と他學派の對論である。ジャイナ教の學匠であるシッダセーナ・デイヴァーカーラ（6—7世紀）が『ニャーヤ・アヴァターラ』(Nyāyavatāra)において、印度論理學での最初期の内遍充論を提唱したことは周知の如くである。狩野助教授は、この内遍充論での包攝關係の概念を取り擧げた。その包攝關係“tathopapatti”と“anyathān-upapatti”が、論理的關係を示す概念として當時既に知られていた“vita”と“avita”なる關係に影響を受け、それをさらに發展させた包攝關係であることを示した。クラッサー博士は、法稱とクマーリラが論じる主宰神批判には共通性のあることを示し、その兩者の説の間の影響關係を論じた。法稱は、肯定的な包攝關係を満たさず、否定的な包攝關係のみを満たす(kevalavyatirekin)論證因が可能であるとするウッドヨータカラの説を批判するが、ブレッツ博士は、その法稱説に對する論駁を『ニャーヤ・ブーシャナ』(Nyāyabhūṣaṇa)から取り擧げ検討した。同じ『ニャーヤ・ブーシャナ』を資料として、法稱の認識論への批判を山上教授が論じた。知識は形相を有するとする有形相知識論を證明する爲の論據として、法稱は、對象とその知とが「必然的に共に認識され

る」(sahopalambhaniyama) という論證因を提示したのに對して、その論證因が不成立であるというニヤーヤ學派からの批判の内容を考察した。生井助教授は、佛教徒の心相續説に對するシュリーダラからの批判を論じた。

三日目の午後の部では、法稱とチベット佛教との關連を中心にした發表が行われた。チベットの認識論は、印度の諸文獻に基づいて構築されたが、時としてその文獻が文脈的に逸脱して解釋されたり、また、翻譯の仕方が十全ではなかった爲に、構築された理論が印度佛教の教理では幾分理解し難い場合がある、という點を吉水博士は指摘し、その例として、ゲールク派の分別知説を取り擧げた。分別知には、實際に存するものとしての顯現と概念的な要素とが混在して生じる、とゲールク派は説くのであるが、分別知と實際に存在するものとの對應を豫想させるこの説は、分別知の中にそうした外界との對應を含めない印度佛教の認識論と異なることになる。そこで、こうしたゲールク派の特異な説の構成に際して用いられたと想定される典據を、法稱の文獻に見出し、兩者の比較を通して、ゲールク派の説の派生の様子を示した。タウシャー博士は、最近發見されたチャパ・チューキセンゲ (Phya pa Chos kyi señ ge) の著作である『ウメシャルスンキトントユン』(dBu ma'i śar gsum gyi stoñ thun) の中から、歸謬法(prasaṅga) 論の特徴を發表した。それによると、チャパ・チューキセンゲは、法稱等の説とは反對に、歸謬法の論證としての妥當性を否定しているとのことである。ファン・デア・カイプ教授は、北京滯在中に自ら發見したチベットでの pramāṇa 論についての初期の論書である『ツェーマシェーラプトウマ』(Tshad ma śes rab sgron ma) (mTshur ston gZon nu señ ge [12—13世紀] の著作) の一部が、サキャパンディタ (Sa skya paṇḍita) の『ツェーマリクペーテル』(Tshad ma rigs pa' i gter) の自注に用いられていることを示し、その中から、定義に関する論述を紹介した。ドレイフス教授は、印度の論理學・認識論の最近の研究の發展に寄與した要因として、チベット佛教學研究への關心の高まりを擧げ、その印度佛教學研究をより進展させる爲にも、チベット佛教における論理學・認識論の歴史的な發展の正確な把握の必要性を強調した。同教授は、そうした問題意識のもとに、初期のチベット佛教認識論を二分する直接知覺説の解釋の二つの流れ、即ち、ゲール

### 第三回國際ダルマキールティ會議（岩田）

ク派とサキヤ派での異なった説の流れを明示し、15世紀以降それらがチベットの認識論の伝統的な流れになっていることを指摘した。そのほかの発表としては、法稱の直接知覚と『瑜伽師地論』でのそれとの比較を行った矢板氏の発表、法稱の年代論を論じた木村教授の発表、佛教徒からみたジャイナ教とミーマーンサー學派のアートマン説を論じた宇野博士の発表、沖教授や船山氏の文獻學的な研究発表などが挙げられる。

今回の國際會議の成功は、偏にコンヴィーナターの桂教授の御盡力によるものである。當初、参加者の間には、會議の實質的な期間は三日間に限られ、その間にこれだけ多くの発表が可能であろうか、という懸念の聲も囁かれていた。しかし、用意周到かつ綿密な準備に基づきプログラムが立てられ、発表は所定のプログラムに従って全て行われた。また、梶山教授、服部教授、桂教授、シュタイケルナー教授、ティルマン教授等が的確なコメントや質問を提示され、ディスカッションを盛り上げた。そのみならず、参加者にも細やかな配慮がなされていた。その一例をここに紹介したい。今回は、日本での國際會議の開催ということもあって、早大の東洋哲學研究室の學生にも参加を呼びかけ、その結果、同研究室からは、筆者も含めて六人が出席することになった。桂教授は、國際會議参加に向けての我々の心意氣を喜ばれ、プログラムの中の研究情報交換の時に、百名前後の参加者全員の前で、早大の學生を紹介する機会を筆者に與えて下さった。これまでの會議では、學生の理解を遙に越えた発表が中心であったので、學生が出席することは稀であった。まして、未だ研究の入り口にも立たない學生の紹介などは思いもよらないことであった。紹介された學生にとっては、世界の學者との接點を得たというだけでも、有意義な経験であったと思われる。會議の後、桂教授の提唱で祝杯を挙げた際に、學生紹介の時間をプログラムに入れたのは、早大での若手の印度學佛教學研究に勢いがあり、十年後の學者を期待してのことである、と同教授は言われた。次回の國際ダルマキールティ會議の開催は七年後（？）であろうが、その頃には、紹介された學生も研究発表を行うまでに育つことであろう。これもまた楽しみである。

第三回國際ダルマキールティ會議プログラム

11月4日(火)

**Presidentail Address by Prof. Yūichi Kajiyama (10:00)**

**Morning Session (10:05 - 12:00)**

***Apoha* and Philosophy of Language**

(Chairperson: Prof. Akihiko Akamatsu)

1. Johannes BRONKHORST  
“Nāgārjuna and *apoha*”
2. Futoshi ŌMAE  
“Dharmakīrti as a *Varṇavādin*”
3. Hideyo OGAWA  
“Bhartṛhari on Representations (*buddhyākāra*)”
4. Ole PIND  
“Dharmakīrti as Interpreter of Dignāga’s *apoha* Theory: The Case of PVI. 125-30”
5. Mark SIDERITS  
“*Apohavāda*, Nominalism and Resemblance Theories”

Discussion (15 minutes)

**Afternoon Session I (13:00 - 14:15)**

**On *Pramāṇavārttika* Chap. II**

(Chairperson: Prof. Takashi Iwata)

1. Claus OETKE  
“The Problem of the Disjunction in *Pramāṇavārttika*”
2. Eli FRANCO  
“Two Circles or Parallel Lines?”
3. Richard HAYES  
“Whose Experience Validates What for Dharmakīrti?”

Discussion (15 minutes)

**Afternoon Session II (14:45 - 17:00)**

**Dharmakīrti and Logic (1)**

(Chairperson: Prof. Yūichi Kajiyama)

1. Motoi ONO  
“Dharmakīrti on *asādhāraṇa-anaikāntika*”
2. Brendan GILLON  
“The Development of Indian Logic up to Dharmakīrti”
3. Tom J. F. TILLEMANS  
“How Much of a Proof Is Scripturally Based Inference  
(*āgamāśrītanumāna*)?”
4. Takashi IWATA  
“On the Interpretation of the Subject (*dharmin*) of the  
Inference Negating Invariable Entities in Buddhist Logic”
5. Ernst STEINKELLNER  
“Yogic Cognition and Tantric Goal: Examples of Dharmakīrti’s  
*kāryānumāna*-Theorem in Use as a Methodological  
Tool”

Discussion (25 minutes)

**Official Photograph (17 : 00)**

**Banquet at Mielparque (18:00 - 20:00)**

11月5日（水）

**Morning Session I (9:00 - 10:15)**

**Dharmakīrti and Ontology (1)**

(Chairperson: Prof. Brendan Gillon)

1. Horst LASIC  
“Dharmakīrti and his Successors on the Determination of  
Causality”
2. Masahiro INAMI  
“On the Determination of Causality”

Discussion (15 minutes)

**Morning Session II (10:45 - 12:00)**

**Dharmakīrti and Ontology (2)**

(Chairperson: Prof. Richard Hayes)

1. Tomoyuki UNO

“Ontological Affinity between the Jainas and the Mimāṃsakas  
Viewed by Karṇakagomin”

2. Raghunath GHOSH

“Is Relation Really Unreal? A Critique of Dharmakīrti”

3. Alex WAYMAN

“Does the Buddhist ‘Momentary’ Theory Preclude Anything  
Permanent?”

Discussion (15 minutes)

**Afternoon Session I (13:00 - 14:40)**

**Dharmakīrti and his Successors (1)**

(Chairperson: Tom J. F. Tillemans)

1. Birgit KELLNER

“The Causality of Perception and the Notion of Perceptibility  
—A Reconsideration of the Term *upalabdhilakṣaṇapṛāpti*”

2. Ryūsei KEIRA

“Kamalaśīla’s Interpretation of *anupalabdhi* in the *Madhyama-kāloka*”

3. Tōru FUNAYAMA

“Kamalaśīla’s Interpretation of *abhrānta* (Non-erroneous) in  
the Definition of Direct Perception”

4. Seitetsu MORIYAMA

“Kamalaśīla’s Proof of Non-substantiality (*niḥsvabhāva*) and  
the Reversed Formula from the *prasaṅga* (*prasaṅgaviṣaya*)”



Discussion (20 minutes)

**Afternoon Session II (15:10 - 17:00)**

**Dharmakīrti and his Successors (2)**

(Chairperson: Prof. Ernst Steinkellner)

1. Vincent ELTSCHINGER  
“Śubhagupta’s *śrutiparikṣā*: Tibetan Text Analysis and Dharmakīrtian Background”
2. Taiken KYŪMA  
“*bheda* and *virodha*”
3. Kazufumi OKI  
“On *pravṛtti*”
4. Tadashi TANI  
“Reinstatement of ‘Extrinsic Determination on Logical Necessity (*bahirvyāpti*)’: Jñānaśrīmitra’s Proof of Momentary Existence”

Discussion (20 minutes)

**Evening Session (18:30 - 20:30)**

**Dharmakīrti and Logic (2)**

(Chairperson: Prof. Hideyo Ogawa)

1. Noboru UEDA  
“On the Deduction of *vyāpti* from the Second Condition of *hetu*”
2. Jonardon GANERI  
“Dharmakīrti’s *trairūpya* and the Role of the Particle *eva*”
3. Shōyū KATSURA  
“Indian Proof Procedure Compared with Toulmin’s Model”
4. Karunesh SHUKLA  
“Buddhist *pramāṇa* Tradition in the Yogācāra System”

Discussion (15 minutes)

**Exchange of Information**

(Chairperson: Prof. Shōryū Katsura)

Exchange of Information about On-going Research Projects

11月6日(木)

**Morning Session I (9:00 - 10:15)**

**Dharmakīrti and Non-Buddhist Philosophers (1)**

(Chairperson: Dr. Ernst Prets)

1. Piotr BALCEROWICZ

“Taxonomic Approach to *dr̥ṣṭāntābhāsa* in *Nyāyabindu* and in Siddharṣiṅaṇi’s *Nyāyāvātāravivṛtti*—Dharmakīrti’s Typology and the Jaina Criticism thereof”

2. Kyō KANO

“On *anyathānuṣṭhāna* and *avīta/āvīta*”

3. Helmut KRASSER

“Dharmakīrti and Kumārila on the Refutation of the Existence of God”

Discussion (15 minutes)

**Morning Session II (10:45 - 12:00)**

**Dharmakīrti and Non-Buddhist Philosophers (2)**

(Chairperson: Dr. Helmut Krasser)

1. Ernst PRETS

“Dharmakīrti’s Refutation of *kevalānvayin* and *kevalavyatirekin* Reasons in the Light of the Naiyāyikas’ View”

2. Chishō Mamoru NAMAI

“Śrīdhara’s Criticism on the Buddhist *cittasantāna* Theory”

3. Shōdō YAMAKAMI

“Dharmakīrti vs. Bhāsarvajña on Perception”

Discussion (15 minutes)

**Afternoon Session I (13:00 - 14:40)**

**Dharmakīrti and Tibetan Buddhism (1)**

(Chairperson: Dr. Helmut Tauscher)

1. Peter SCHWABLAND  
“The Function of Affirming and Negating Cognition in Early Tibetan Exegeses regarding the Definition of Valid Cognition”
2. Chizuko YOSHIMIZU  
“*drśya* and *vikalpya* or *snang ba* and *btags pa* Associated in a Conceptual Cognition”
3. Hideomi YAITA  
“*Yogācārabhūmi* and Dharmakīrti on Perception”
4. Ronald M. DAVIDSON  
“Masquerading as *pramāṇa*”

Discussion (20 minutes)

**Afternoon Session II (15:10 - 17:00)**

**Dharmakīrti and Tibetan Buddhism (2)**

(Chairperson: Prof. Katsumi Mimaki)

1. Toshihiko KIMURA  
“New Chronology of Dharmakīrti”
2. Helmut TAUSCHER  
“Phya pa chos kyi seng ge’s opinion of *prasaṅga* in his *dBu ma’i shar gsum gyi stong thun*”
3. Leonard VAN DER KUIJP  
“When a Definiens Requires a Definition: Some Remarks on *mthsan nyid* by Mtshur ston Gzhon nu seng ge (ca. 1150-1220)”
4. Georges DREYFUS  
“Getting Oriented in the Tibetan Tradition: A Contribution”  
Discussion (20 minutes)